1992（平成4）年 1[illegible]月 1日　兵庫県出石郡出石町内町59　勝林寺

勝林寺寺報

まだまし差別

「五体満足、知能もそこそこの子供が産まれました。女の子ではありましたが、そんなことはどうでもよい。あのおうちの子、あの人の子供のことを思えば、まだましと喜こんでおります。」

ようやく出産を終えたおかあさんからよく聞く喜びのことばです。

からだや知能に障害を持って生まれ出てくる子供もあります。未熟児のまま生まれる子供もあります。女であったり男の子として生まれたり。　生命の誕生はそのときすでに千差万別です。千差万別で一人一人のいのちは生まれでるのです。千差万別で生まれてきた一人一人のいのちは、だから一人一人貴いのです。

ところが何を基準にして比較するのでしょうか、あれよりもこれが上等、あの子のいのちよりうちの子のほうがまだまし。あんな子供に生まれなくてよかった、しあわせだったと、人を見下げ人を差別することによって我が身をほこり自分のしあわせを喜ぶ。そのん風潮がわたしたちの社会にありはしないでしょうか。

まだあります。

「あの人がやってることに比べたら、俺のほうはまだまし、いいほうだ。」自分を正当化するために、人を思い切りけなしおとしめ、あいつよりもわたしはまだまし。なんとも「ひっくりがえりの善人」が横行跋扈している世の中ではありませんか。

曇鸞というかたは

千差万別のいのちをいきる全ての人は平等に、如来さまの願力に支えられて浄土往生の貴いいのちを生きるべきであるのに、現実世のなかのひとびとは、第一、あいつより私がまだましな善人といって、自利利他共々のいのちをいきる菩薩の生き方のじゃまをしている。第二にはこの人たち、自分ひとりの幸せのために人を平気で踏み付けにする。第三には悪い自分を反省するということのないこの人たちは、すばらしい他人をけなし誘る。第四にこうした「ひっくりがえりの善人」は我欲私欲で闘争差別の社会を作ってしまう。そしてこれらは総て如来さまの大きないのちにささえられていることを忘れて、小さな自利我欲のいのちを互いに差別し合いぶっつけあっている。

総じて人様を踏み付けにして自分のしあわせを思おうとしがちなわたしたち、あいつよりはまだましという形で自分を立てようとしがちなわたしたち。こころしていまの曇鸞さまのいましめを聞かせて頂きましょう。

別修（敬老）報恩講

法悦　歓喜
うた　おどりの
秋宵一刻

十月二十四日の報告

とくに私たち仏婦役員にとりましては初めてのことでもありとても不安でありました。

先輩の仏壮役員の方々の指示で運ばせていただいたものの、何人お参りくださるだろうか、喜んでいただくようなことができるだろうかと、その日その時まで心配でした。

「案じるより産むが安し」とは、その日になってからの私たちの感激でありました。マイクロバスに乗ってお参りいただいたお年よりの方々と百人あまりの正信偈の大合唱。涙の出るほどの感激でした。「よく来てくださいました。ようおまいりでした」とこころから合掌しました。

ご院家さまのご法話がグッと胸にきたところで懇親演芸会にうつりました。西池深音ちゃんと永井理恵さんトリオ共演のうたとおどりをファンフーレとして、出るは出るはの盛り上がり。ほんとうに案じるより産むがやすし。これからは勇気をだして積極的にとりくめば皆が助けて盛り上げてくださるのだと教えていただいた今度の報恩講でした。（仏婦役員）

十一月のこよみ

一日　本覚寺報恩講
横山誠氏宅法事・田中正枝氏宅法事
二日　出石お城まつり
三日　同じ
四日　津居山照満寺仏壮報恩講
五日　八代光顕寺報恩講
六日　同じ
東海教区僧侶研修会（名古屋）
高福寺報恩講
七日　同じ
永井淳氏宅法事
八日　法輪会（平田専福寺）
十日　得度習礼（西山隠）
玉日会（真覚寺）
教区相談員中央研修会（大谷本願）
十一日　教区相談員中央研修会
一二日　同じ
一四日　大阪源光寺報恩講
一五日　福成寺報恩講
一六日　同じ・十六夜会（正福寺）
中央相談員協議会
一八日　基幹運動本部会議
おみがき奉仕
二一日　報恩講
二二日　同じ・正福寺報恩講
二三日　同じ
二七日　玉井克弥氏宅祥月
二九日　山田まつえ氏宅法事
出石組総代一泊研修（本山）

葬儀
九月十三日
上小田
浜　なち子様

☎079652－3083　テレホン法話☎079652－5800

新たなであい

突然夫と死別して、夢の間に一年過ごしてしまいました。

ほんとうにアッという間のことでしたので、それから三月ほどのあいだは夢とうつつの間をさまよっているようでなにも手につかず、ただ夫の写真に向かって「ウソでしょウソでしょ」といい続ける毎日でした。

「お母さん、そんなにしていても仕方ないわ。お母さんのくらしの方が大事やで…」と嫁からいわれて、それで写真は長押にあげて、それからはお仏壇でお正信偈をあげることにいたしました。

それから今日まで、お仏壇のまえで、いろいろなことが思われてきました。

まず、いっしょになってからのいろいろな思い出がひとつひとつ鮮明に甦ってまいりました。そのひとつひとつを走馬灯のように思いかえしながら、そのうちに何と申しましょうか、そのひとつひとつの思い出について悔やまれて悔やまれて、「おとうちゃん、申し訳ないことでした」という思いと共に、なにやら今になってから、夫のすばらしさと言うか、ほんとうの夫に出会えてきたような感じがいたして参りました。

お互いに生きてくらしていたあいだには見えなかったものが、《死》というものをきっかけにして、ほんとうの夫と出会えたのでしょうか。

なぜ？と考えてみます。

生きてくらしている間は、どんなに夫婦でも、それぞれに、俺が私がと張り合って、損だ得だなどというものがわたしたちを隔てて、ほんとうの夫婦の出会いを邪魔していたのです。それでいっしょに暮らしていてもいつもしっくりとはいっていなかったのではありますまいか。

ところが、悲しいことには違いありませんが、死に別れたいまはちがいます。わたしたち二人のあいだにはなんの隔てもありません。お正信偈やお念佛をとなえたら、そこにはすきとおった夫との出会いがあります。

一年たって、いまようやく私たち、あたらしい出会いをもてたように思います。

お葬式も、七日七日のお勤めも、また法事も、それは決して《お別れ》の悲しいばかりの式ではありませんでした。いうなれば、いよいよ新しい出会いを発見していくうれしい営みなのだったと、そんなことを、まいにちのお仏壇のまえのお念佛のなかで思わせていただいております。

法輪会

聞法会開催

（法輪会　秋の定例研修会）

11月8日（1時受付）

但東町平田　專福寺

講師　奈佐　応供乗生先生

会員はもちろん誘い合わせて聞法ください。

報恩講

勝林寺

11月21日夜8時始まり

22日朝10時より

講師　津川　馨先生

☆時間に遅れないようお参りください。
☆送迎バス運行します。

後日案内します。

ご消息披露式典

本願寺神戸別院・兵庫教区教化センター設立に関する

十月二十二日、出石組正福寺において頭書のご消息披露の式典と協議会が開かれました。

「ご消息」とは、このことについての本願寺門主さまからのお願いのお手紙です。組内各寺から住職・総代・仏壮仏婦会長が出席しました。

勝林寺では一昨年からしばしば寺報で取上げ今年度の代議員会でも総代より説明し、それに対する対応のあらかたも協議了承いただいております。その線に沿ってなるべく早急に処理したいと考えております。

すなわち、住職・衆徒への賦課金を除いた全金額を「基本金会計」（普通預金分）から立て替え支出させていただきます。ナオ、この返済処置に就いては次の代議員会で改めてご相談いただくことにしたいと存じます。

ご報告を兼ねご了承お願い致します。

勝林寺住職

育児欄　育てられる心

最近あるお母さんから電話をいただくことがありました。その方はまだ生まれたばかりのお母さんでした。

"生まれたばかりのお母さん"とはちょっと妙な表現ですが、そのお母さんは三ケ月前に出産したばかりですから、まだお母さんになってから三ケ月しかたっていなかったわけです。

「きみ、今日の声は本当に弾んでるね」

「そうですか。自分じゃ意識してないんですけど」

そうです、お母さんになるということは、大きく深い喜びであって、それはとても小さな意識ではくくりきれないほどのものだと思います。

話は弾み、やがて、これからの育児のことが話題となったとき、私はそれとなく私たちの失敗を話しました。

赤ちゃんの無邪気な顔には、親にそれと意識させないほど、親の目を引き付けてしまう力があります。

それは親に、か弱い自分のめんどうを見させる力であるばかりでなく、"親のこころを育てる力"でもあると思うのです。

私にはそれを見取る力が欠けていたのだと思います。

可愛く利口にという願いは悪かろうはずはありませんが、しかし、赤ちゃんの眼差しから、自分がその子の親にさせてもらっているということ、さらにいうなら、その子に、親が育てられていているという視点が欠けているということです。

"こころを育てる"ということは、ほんとうにむずかしいことです。

私のことでいいますなら、それがもっぱら子どものこころを育てるということだけになっていて、自分自身のことになっていなかったということからして、その難しさがはじまっていたと思います。

私は今もって自分の大切なこころをよく育て上げることができていません。それにもかかわらず、子供のこころを育てよう、育てることができると思っていたのでした。

子のこころを大切にしようと願うなら、まず親のこころが育てられることだと思います。

親鸞さまの『歎異鈔』の次のおことばをしみじみと身にしみて思うこのごろです。

「聖道の慈悲というは　ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども　おもうがごとく　たすけとぐること　きわめてありがたし。（後略）」

「存いおん」誌より